はなの村だより

学園花の村機関紙第103号
2019年1月1日（火）
編集兼発行人　伊藤公博

☎ 042‐636-8290
Fax 042-636-8291
〒 192-0914
八王子市片倉町
937－78

学園花の村の指導者
相羽春一さんが逝く
（旧臘十四日に、百一歳で）

相羽さんを偲んで

小関　栄

相羽春一さんは、戦友の宮城正雄さんと一緒に花のむらの設立時から大功労があった方であります。また、当地では有名な農業一筋の篤農家で、私たちも豆類や野菜作りを始め、布マルチによる稲栽培までご指導を受けました。相羽さんが何気なく語られた次の言葉は含蓄深く、これを偲んで哀悼の言葉としております。

「農業は楽しく働らかなければ長続きしないよ」

「農業は自然に合ったことをする、暦(季節)に従って働くことだ」

「野菜などの作物と話し合いながら作業するとよく育つものだ」

「前の年の作業の日記を見ながら今年も計画して働いている」

さらに、相羽さんは手先が器用で浮字工芸品をたくさん作っていましたが、その中で以徳報徳や至誠勤労分度推譲の浮き文字の作品を各所に掲げて報徳実践をしていたし、私も数々頂きました。ご臨終も眠るように静かに息を引き取られたそうですが、正に一世紀を超える長寿を健康で全うされた模範的な人でした。茲に相羽春一さんから頂いた温情溢れる数々のご指導と昵懇なご厚誼深く感謝申し上げます。有難うございました。

有機農業の継続を願って

光陽の里　楽農会代表　野田芳宏

ここ光陽の里楽農会も２０２０年１２月をもって解散することになりました。津野幸人先生が日本最大の自然農の里として学園はなの村を実験農地として立ち上げて、早２０余年が経ちました。光陽の里の実践者が高齢化したことと空き農地が増えて、今まで通りの経営が困難となってきたのが解散の理由です。とはいえ、日本最大の有機農地が無くなることに頭を悩ませました。

幸いなことに耕作者の中に日本ＪＡＳを取られ、日本の有機農業を守っておられ、「しあわせ野菜畑」を運営しておられる大角昌巳さんが、楽農会の後を引き継いでくれるということになりました。一昨年から農地中間管理機構という国や市役所の機構が発足しました。その管理の中で「しあわせ野菜畑」さんが運営してくれることになりました。近年耕作料が大幅に低下して、周囲の地域との整合性が１０ａ当り１，５万円の耕作料と一致することが困難になってきました。農地中間管理機構を通してその整合性がもう一度見直されることが地主さんも納得されることと思います。

学園はなの村の機関紙である「はなの村だより」にこの文を乗せて頂くことは誠にありがたいことと喜んでおります。

沢山の小粒の黒実のなるヒサカキ（柃）

小　関　　栄

ヒサカキは、わが家の界隈に沢山自生している。常緑の葉は楕円形で厚みのある革状で光沢がある。この葉の付け根に晩春、下向きの小さなクリーム色の花がいっぱい咲く。これが晩秋から年暮にかけて紫黒色の小粒な実になる。葉陰にこぼれるばかりにたくさんの実を付けるのが特色だ。（右の写真のように）

ヒサカキは榊（サカキ）に似ているが榊ではないと云うので非榊（ヒサカキ）が語源と思っていたら、サカキのお姫様のようだから姫サカキと云うし、また、日当たりを好むから陽サカキといい、さらに実が沢山なるから実サカキなどと、この木の名前の由来には諸説ある。

この付近ではヒサカキを仏様の木としてのシキビに代わってお墓や仏壇にお供えしている。サカキ同様に縁起の良い木として各家庭で宗教的に使われている。（ヒサカキの木　30.12.21 撮影）

仏前に　供えるヒサカキ　実こぼれる　淡水

第５回　「報徳」美合セミナー　参加報告

学園はなの村事務局長　藤本　将

平成 30 年9月30日、10月1日の2日間　愛知県美合で第 5 回「報徳」美合セミナーが開催され「学園花の村」から藤本将、池田百合子さんの 2 名が参加しました。報徳美合セミナーは全国報徳団体連合会の主催する研修会で、二宮尊徳の報徳思想についてまなぶもので、今回は二宮尊徳の子孫である中桐万里子さんのご講演がありました。

先生のお話はわかりやすい語り口で、かつ説得力のあるものでした。報徳陣営も得難い方を有しているとの実感をもちました。総体では 30 名ほどの参加でした。今後の更なる発展を期待しております。

「活き粋（いいき）　ばあばの学舎（いえ）」の冬景色あれこれ

「活き粋　ばあばの学舎　だより」（７）　　柴　桂子

異常気象のためか、冬の野菜や草花が思わぬ成長で１２月にはぐんぐんのび花を咲かせている。小松菜はしゃもじの３～４倍ほどの葉を広げ、ビタミン菜の類も同じほどの葉をつけ、中にはすでに菜の花を何本も咲かせている。先日、遊びに来た若い友人は、大喜びでそれらを摘みとり、最高のご馳走だと気持ちよくバリバリと食べていた。寒菊や水仙や八重の椿はすでに盛りを過ぎ、ネコヤナギは早くも白い芽をのぞかせている。クリスマスの時期になって、塩害にかかったもみじが、遅まきの紅葉で庭をかざっている。２～３月に出回るはずの底に臍のあるネーブルオレンジもすでに色づき、熟れすぎて落ち始めている。

蔓に出来るエア・ポテト（宇宙芋・山芋の一種・卵くらいの大きさ）も今年はいくつも実を付けた。煮物や、みそ汁の具、てんぷらなど色々な料理を楽しんでいる。

より歩きやすくするために、庭にセメントまじりの砕け石を敷き、その間に飛び石を２１個を置いた。我ながらよくできたと、いささか苦労はあったが満足している。また、庭の２カ所に骨董屋から仕入れた夫婦道祖神などを据え悦に入っている。

「活き粋　ばあばの学舎」には、どんどん訪問者が増え、取り立ての野菜で一緒に食事を作って夜遅くまでお喋り会などを楽しんでいる。時には近郊の村や山奥まで手作り蕎麦や、畑の中にある農家レストランに食事に出かけたり、あちこちで開かれる文化展や小さな博物館を訪れ、地域の文化を味わっている。

古くから続く祭りや年中行事を含め、地域には色々な催し物もあり、静岡は東海道の真ん中でもあることから古い文化が多く残り、気候温暖な土地柄、海山の幸に恵まれ、こんなに住むのに適したところはないと、移住を決意したことの喜びを日に増してに強く感じている。「文化と食を楽しむ会」を立ち上げ、より多くの人々と地域の文化を楽しむ計画も立てている。

今年も楽しく活動しました

里山倶楽部

溝口博之

里山倶楽部は倉馬の里を拠点として様々な活動をしています。活動の底辺にあるものは自然環境を生かした会員の生きがいづくりです。会員はサラリーマンリタイア組が多く、今までの人生の中で農業経験など経験したことがないことをやることができたり、異業種経験者との付き合いの中から新鮮な発見ができたりで楽しく活動しています。

今年のヒット作業は春のワラビ狩りで道の駅に出荷して五万円ほどの売り上げ、夏のかぼちゃやコロタンメロンも数万円の売り上げまた、秋の自然薯栽培も立派な芋がとれ、売り上げもあり芋汁パーティも盛り上がりました。昨年完成したピザ窯はほかの団体にも貸しだして大いに活躍しました。マルチ米もうまくできました。

大豆・しいたけ・トマトはまあまあ、ゴマ・エゴマ・そば・タケノコはペケ。

フジバカマを育ててアサギマダラ蝶を呼ぼうと計画しました。フジバカマは群生させて大量のアサギマダラを呼んで子供たちを観察会に来てもらうように考えています。また、ハイキング部会を立ち上げました。近辺の里山コースを開発したり、ちょっとした山登りにも挑戦したいと思っています。

果樹園もだんだん育ってきました。自然薯も来年は倉真温泉などに出荷できるくらいに作付け量を増やす計画です。

写真は「かき刈り」に集う里山倶楽部の皆さん

もちろん、旅行や各種パーティは常時組み込んで大いに楽しみたいと思います。

入会予定者も五～六名おり、来年も賑やかになりそうです。それぞれの会員が元気で楽しい人生を過ごすことが一番の社会貢献だと思っています。

平成30年度産布マルチ稲作生産状況

丁寧な代掻きと布浮かべ 灌漑の徹底により良好な出来

倉馬の里　藤本　将

今年も昨年と同じ掛川市初馬の田んぼ（7畝5歩）で布マルチ稲作を実施しました。昨年は代掻きの不徹底から田んぼに高低差が生じ、布浮かべ灌漑が不十分でした。そのためヒエが繁茂し、収穫がほとんど皆無でした。

今年は代掻きを丁寧にやり田んぼの高低差をなくしました。

今年の布マルチの敷設は昨年の5月22日から6月5日にずれましたが里山倶楽部の方々にお手数頂きました。

また布マルチ敷設後の布浮かべ灌漑にも十分配慮しました。とりわけ水の管理については溝口さんや石山保さんにひとかたならぬお世話をいただきました。

また台風による強風被害も受けましたがその修復作業についても溝口さんのお手を煩わせました。おかげさまで、玄米ベースで150キロの収穫があり、近年にない好成績を上げることができました。

11月13日、14日は大阪で考案者の津野先生を囲んで布マルチ稲作の研究大会が開催されました。熱心な意見交換がありました。

今年のお米は大変美味しく、引き合いが強く対応に大わらわです。日本人の2人に1人はガンにかかると言われている現在ですが「食の安全・安心」の観点から有機米への取り組みについて国民的な関心を持ってくれるよう働きかけていく必要があります。

またとにかく有機米は「旨い」のです。お世話頂きました方々に心からお礼申し上げます。どうもありがとうございました。